

妊孕性温存治療を受けたがん患者が感じた事 ～アンケート調査結果～

竹林 七重¹⁾ 松山 由紀子¹⁾ 中西 佳与¹⁾ 茅切 純子¹⁾ 柴崎 有美¹⁾ 橋本 知子¹⁾ 中岡 義晴

¹⁾ 森本 義晴²⁾

1) IVF なんばクリニック 2) HORAC グランフロント大阪クリニック

目的

がん治療後のQOL向上のため、化学療法前に妊孕性温存治療に訪れる若年がん患者が増加している。がん告知による混乱のなか生命の危機だけでなく将来の妊孕性の喪失の可能性という二重の危機を抱えて治療を受けた患者がどう感じていたか把握するためアンケート調査を実施した。

対象・方法

2017年2月～11月、がんと診断され妊孕性温存治療目的で受診した男女を対象とし、32名に無記名アンケートを配布、21名（男性7名、女性14名）より回収（回収率65.6%）した。初診来院時から妊孕性温存治療終了までの7項目について各時点で感じたことの自由記述からキーワードになる単語を抜粋し、文面から「肯定的・否定的」に分類した。

結果・考察

初診来院時に不安なことは、生殖医療に関する知識の不足、病院のシステムや治療費用、凍結の可能性などであり、治療内容やシステムに関して分かりやすい情報提供の大切さが浮かび上がってきた。採精・採卵時は緊張や不安、痛みや麻酔に関しての否定的な単語が多く、採精・採卵後も痛かったという否定的な単語が変わらずある一方で、不安については肯定的に変化しており看護師の声掛けやケアで解消できることが確認できた。凍結結果を聞いた時は凍結出来てうれしい、安心した、結果に満足した、これからのがん治療を頑張れるなど肯定的な単語が多数であった。また妊孕性温存治療を終えてどう感じるかは可能性が残せた、安心、感謝などに加え移植に関してや自然妊娠も試したいとのコメントもあり、がん治療後に子どもを持つことについての意欲が見受けられたことから、二重の喪失の危機にある患者にとって負担ではあっても妊孕性温存治療が肯定的な働きかけになったと確認できた。がん生殖の看護では妊孕性温存治療の実施の有無を含め、時間の制約があるなかで様々な選択と決定が可能になるような情報提供の仕方の工夫とコミュニケーションをとることの重要性を再認識した。